

介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題

ー実習施設へのアンケート調査からー

福田 洋子 野呂 健一 寶來 敬章 鷲尾 敦

高田短期大学 高等教育研究会

1. はじめに

本稿の目的は、介護実習に関するルーブリック評価の導入の可能性と課題を検討することである。具体的には、本学の高等教育研究会が作成した介護実習に関するルーブリック評価案について、介護実習において実習生の評価を担当している施設へアンケート調査を行い収集したデータから分析することで、現行の実習評価の課題と介護実習用のルーブリック導入の意義を探ることを中心的な目的としている。

2012年に文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、「教員が学生に何を教えるのか」から「学生が何を学び、何ができるようになったのか」という学士課程教育の転換の必要性が主張されている。その中で、学生の主体的な学修を促すことや学生の能動的学習（アクティブ・ラーニング）、事前・事後学習のための授業の工夫等が求められるようになってきた（文部科学省、2012）。高等教育機関だけでなく、個々の大学教員が学生の状況等を勘案しながら「大学の教育の質」を考え、実践することが求められている。学修成果の評価についても多くの検討がなされており、知識を問うことによる評価だけでなく、グループワークでの取り組みや学修行動、プレゼンテーションやディスカッションなどといったパフォーマンス評価をする必要がある。このために活用される一つの評価方法としてルーブリックがある。

ルーブリック（rubric、評価指標）とは、ある課題の達成状況のレベルを質的に評価する基準である。一般的には、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもの（Stevens 他 訳書、2016、p.2）とされている。このルーブリックを用いた評価は高等教育をめぐる一つの潮流となっており、各大学において導入が進められている。ルーブリックを用いた評価は、それぞれの指標で学生自身が「何を求められているのか」を把握することができることに加えて、教員が「どこまでできているのか」を学生に提示できるという点で大きな意義がある。

また、大学での学びは必ずしも学内だけの経験で終始するものではなく、資格や免許の取得のためには学外での実習が必修となっている。例えば教育実習や保育実習などは、実際の教育・保育現場での学びが重要視されている。実習に関するルーブリックの導入については尾崎他（2017）や守谷他（2017）などが散見できるものの、看護や医療、理学療法学の分野が多い。そこで、高田短期大学高等教育研究会では、介護実習の評価に関するルーブリックの作成・導入を一つの課題とし、実際に実習生を受け入れていただいている施設の職員との連携を通して、作業を進めているところである。本稿は前年度の研

究（福田他、2017）を継続したものであり、本研究会が作成したルーブリック案を施設の方に見ていた上で、実習評価に関するルーブリック導入の可能性と課題を明らかにすることを目的としている。

2. 開発の経緯

昨年度、我々高等教育研究会(2017)では、介護実習での評価にルーブリックを用いることを提案し、まず汎用的な能力に関するルーブリックの試作を行った。もともと、三重県での介護実習の評価は、「三重県版介護実習の手引き介護実習ノート（以下、実習ノートという）」で統一された評価票とその指針によって行われてきた。実習ノートは、2010年に三重県の介護福祉養成施設協議会が介護福祉実習において統一した内容で、実習施設と連携を図るために作成した手引きである。2017年までに3回の加筆、修正を実施したが、実習評価票の形態は変えることなく使用している。現行の評価票においては、実習指導者の評価の視点により評価点が変わってくることから、学生は、評価点の根拠がわからないことが多く、評価点に信憑性を感じられない結果となることもあった。現行の評価票は、実習の振り返りとして、何をどのように高めていったら良いのか学生には分かりにくかったということもあり、ルーブリックを利用した評価を提案し、ルーブリックの開発を進めている。

昨年度(2017)の報告では、主に汎用力に関する評価指標および基準を試作したが、今回は、それらも含めて介護実習Ⅱで利用している全評価項目を採点できるよう評価指標および基準を策定した。各評価項目には、いくつかの評価指標が実習ノートに記載されているが、ルーブリックの評価指標を作るにあたり、その評価指標の取舍選択も行った。ルーブリック開発にあわせて

修正した評価票（図1）は、ルーブリック評価後に該当する評価項目に点数を書き入れるだけでなく、学生の状況に応じたコメントを記載するようにした。例えば、認知症の利用者との関わりの中でコミュニケーションが取りにくく援助関係が築きにくい場合、評価点が低くなってしまいう可能性がある。ルーブリックだけではわからないこのような学生の状況や、学生の特筆すべき動きや成長過程などを記載できるようにした。

表1 介護実習Ⅱ評価票の修正版

| 介護実習Ⅱ 評価票 | | | | | |
|---|--|--|--|---|--|
| ※評価票は、各校の実習状況に応じ、適宜抜粋して使用する。 ※各項目の評価点は実習Ⅱのルーブリック評価基準を参照。（別紙） | | | | | |
| 学 校 名 | 高田短期大学 | 学籍番号 | 氏 名 | | |
| 施 設 名 | | 実習時間 | | | |
| 実 習 期 間 | 年 月 日(曜日) ~ | 年 月 日(曜日) | [日間] | | |
| | 評価点[5:大変よい 4:よい 3:普通 2:努力を要する 1:かなり努力を要する] | | | | |
| 評価項目 | 評価着眼点 | 評価点 | 評価できるところ 根拠・改善点 | | |
| 実習態度 | 積極性 | 意欲的に取り組む姿勢が見られる | | | |
| | 協調性 | 職員・利用者・実習生との協調性がある | | | |
| | 守秘義務 | 利用者のプライバシー保護に配慮できる | | | |
| | 礼儀 | 規則を守り、礼儀正しく接遇できる | | | |
| | 健康管理 | 自分の健康に留意できる | | | |
| 自己目標 | 実習目標・実践 | 自分の立案した目標に向かって、実践できる | | | |
| | 振り返り | 自分の実践した実習内容を客観的に振り返ることができる | | | |
| コミュニケーション | 意思疎通を図る | 利用者との意思疎通が図れる 職員との意思疎通が図れる | | | |
| | (受け持ち)利用者理解 | 利用者の生活が理解できる 生活者として、身体的・精神的・社会的な側面から個性が理解できる | | | |
| 介護活動 | 生活支援技術 | 介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できる 個別性に応じた介護の必要性を理解して実施できる 利用者のニーズに応じたレクリエーションを企画し実施できる | | | |
| | 福祉用具の適切な使用 | 利用者に応じた正しい使用ができる | | | |
| | 介護過程の展開 | | 介護に必要な情報の収集ができる 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にでき 実施可能で具体的な介護計画が立案できる 介護計画に則した的確な介護実践ができる 自らの介護実践の評価ができる | | |
| | | 観 察 | 介護場面を観察して、適切な反応や行動に移せる | | |
| | | 記 録 | 介護場面を的確に表現できる | | |
| | 報 告 | 利用者の変化や反応など報告を要する事柄を判断し、報告できる | | | |
| | 施設理解 | 施設理解 | 施設の概要が理解できる | | |
| 職種理解 | | 多職種の専門性を理解し、介護福祉士の役割と専門職としての連携と協働の意味がわかる | | | |
| 総括評価点 (1~5にて評価して下さい) | | 総括コメント | | | |
| 上記の通り評価します | | 施設名 | | | |
| 平成 年 月 日 | | 施設長名 | | 印 | |
| | | 登録指導者名 | | 印 | |

表2 開発したルーブリック（介護活動の一部）

| 実習Ⅱ | 評価項目 | 評価着眼点 | 評価指標(目標) | 1点 | 3点 | 5点 | 評価点 | 合計点 | 評価規準評価点 |
|------|-------------------------------|--|---|--|--|---|-----|----------------|----------------|
| 介護活動 | (受け持ち)利用者理解 | 利用者の生活が理解できる | 利用者の1日の生活を把握している | 利用者の1日の生活を把握しておらず知らずともしない | 利用者の1日の生活を把握しようとしている | 利用者の1日の生活を把握している | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | | 生活者として、身体的・精神的・社会的な側面から個性が理解できる | 受け持ち利用者の人間関係を把握している | 受け持ち利用者の人間関係を把握しておらず知らずともしない | 受け持ち利用者の人間関係を把握しようとしている | 受け持ち利用者の人間関係を把握している | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/3) |
| | | | 受け持ち利用者の状況を把握している | 受け持ち利用者の状況を把握しておらず知らずともしない | 受け持ち利用者の状況を把握しようとしている | 受け持ち利用者の状況を把握している | ——点 | | |
| | | | 受け持ち利用者がどのような気持ちで入所しているか知らずに関わっている | 受け持ち利用者がどのような気持ちで入所しているか知らずに関わっている | 受け持ち利用者がどのような気持ちで入所しているか知って関わろうとしている | 受け持ち利用者がどのような気持ちで入所しているか知って関わっている | ——点 | | |
| | 生活支援技術 | 介護実習を通して、生活者の望む生活が理解できる | 利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことができる | 利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことができない | 利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことがある | 利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | | 個別性に合った介護の必要性を理解して実施できる | 個別性に合った食事の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った食事の介護を安全・安楽に行うことができない | 個別性に合った食事の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った食事の介護を安全・安楽に行うことができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/4) |
| | | | 個別性に合った移動・移乗の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った移動・移乗の介護を安全・安楽に行うことができない | 個別性に合った移動・移乗の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った移動・移乗の介護を安全・安楽に行うことができる | ——点 | | |
| | | | 個別性に合った排泄の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った排泄の介護を安全・安楽に行うことができない | 個別性に合った排泄の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った排泄の介護を安全・安楽に行うことができる | ——点 | | |
| | | | 個別性に合った着脱・整容の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った着脱・整容の介護を安全・安楽に行うことができない | 個別性に合った着脱・整容の介護を安全・安楽に行うことができる | 個別性に合った着脱・整容の介護を安全・安楽に行うことができる | ——点 | | |
| | 利用者のニーズに合ったレクリエーションの企画と実施ができる | 利用者の持つ力や健康な側面を見つけ、障害に応じたレクリエーションの企画・実施ができる | 利用者の持つ力や健康な側面を見つけ、障害に応じたレクリエーションの企画・実施ができない | 利用者の持つ力や健康な側面を見つけ、障害に応じたレクリエーションの企画・実施ができないときがある | 利用者の持つ力や健康な側面を見つけ、障害に応じたレクリエーションの企画・実施ができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) | |
| | 福祉用具の適切な使用 | 利用者に応じた正しい使用ができる | 利用者に合った福祉用具の使用が正しくできる | 利用者に合った福祉用具の使用が正しくできない | 利用者に合った福祉用具の使用が正しくできない場合がある | 利用者に合った福祉用具の使用が正しくできる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | 受け持ち利用者の介護過程の展開 | 介護に必要な情報の収集ができる | 利用者とかかわりを持つなかで必要な情報を得ている | 利用者とかかわりを持つなかで必要な情報を得ることができない | 利用者とかかわりを持つなかで必要な情報を得ることができないときがある | 利用者とかかわりを持つなかで必要な情報を得ている | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/2) |
| | | | 職員から得た情報を活用できる | 職員から得た情報を活用できない | 職員から得た情報を活用できないことがある | 職員から得た情報を活用できる | ——点 | | |
| | | 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできる | 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできる | 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできない | 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にしようとしている | 情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | | 実施可能で具体的な介護計画が立案できる | 情報をもとに個別に応じた介護計画の立案ができる | 情報をもとに個別に応じた介護計画の立案ができない | 情報をもとに個別に応じた介護計画の立案をしようとしているが十分でない。 | 情報をもとに個別に応じた介護計画の立案ができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | | 介護計画に則した的確な介護実践ができる | 介護計画に則した的確な介護実践ができる | 介護計画に則した的確な介護実践ができない | 介護計画に則した的確な介護実践ができないときがある | 介護計画に則した的確な介護実践ができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) |
| | 介護実践の評価ができる | 個別に応じた介護計画の評価・修正ができる | 個別に応じた介護計画の評価・修正ができない | 個別に応じた介護計画の評価・修正ができないときがある | 個別に応じた介護計画の評価・修正ができる | ——点 | ——点 | ——点 (合計点/1) | |

評価指標ごとの評価から評価票の各評価項目を得点化する手法は、前年度の試作ルーブリックで検討した方法をそのまま採用した。評価項目ごとに複数の評価指標があるが、それぞれの評価基準は3基準とし、5,3,1の得点を配した。指標ごとに得た得点を合計し、評価指標の数で割り算することにより、5点満点の評価項目の得点となるよう表を構成した。表2は、今回作成したルーブリックの一部である。

3. 研究方法

2017年12月後半、介護実習を行う29施設に対し、この試作ルーブリックと介護実習Ⅱの評価票、質問用紙を、各施設の実習指導者数にあわせた部数送付した。1月にアンケートの回答を回収し、19施設40名から回答を得た。

また、養成校の実習担当教員に対しても聞き取りを行っているが、今回はアンケート結果についてまとめた。

なお、回答者の年齢、性別、本人に実習経験があるか、実習指導年数、保有資格について表3に示す。

4. ルーブリック評価導入の意義

4.1 現行評価についての悩み

実習担当者が現行の実習ノートでの実習評価に関して、「実習評価の悩み」を有しているかについて指導経験年数別に分類したものが図1である。全体として「大変ある」と「少しある」が28人(70%)となり、高い傾向にあることがわかる。指導経験年数別においても、実習評価に関する悩みは、多くの実習担当者が感じていることであり、指導年数が多い人ほど実習評価に対する悩みが多い傾向があることがわかる。

また、実習担当者自身の実習経験の有無による回答の違いを比較すると(図2)、実習経験がある職員は悩みの有無について「大変ある」と

表3 回答者の属性

| 実習指導年数 | 1～3年 | 4～6年 | 7～9年 | 10年以上 | 総数 |
|---------|-------|------|-------|---------|----|
| 20代 | 2 | 1 | | | 3 |
| 30代 | 10 | 4 | 1 | | 15 |
| 40代 | 3 | 3 | 2 | 2 | 10 |
| 50代 | 4 | 2 | | 5 | 11 |
| 60代 | | | | 1 | 1 |
| 男 | 13 | 6 | 3 | | 22 |
| 女 | 6 | 4 | | 8 | 18 |
| 実習経験あり | 15 | 9 | 3 | 5 | 32 |
| 実習経験なし | 4 | 1 | | 2 | 7 |
| 実習経験未回答 | | | | 1 | 1 |
| 総計 | 19 | 10 | 3 | 8 | 40 |
| 保有資格 | 介護福祉士 | 看護師 | 社会福祉士 | 介護支援専門員 | |
| | 38 | 1 | 6 | 13 | |

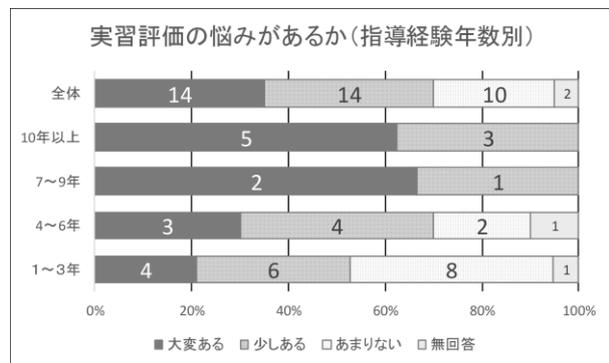


図1 実習評価の悩み(指導経験年数別)

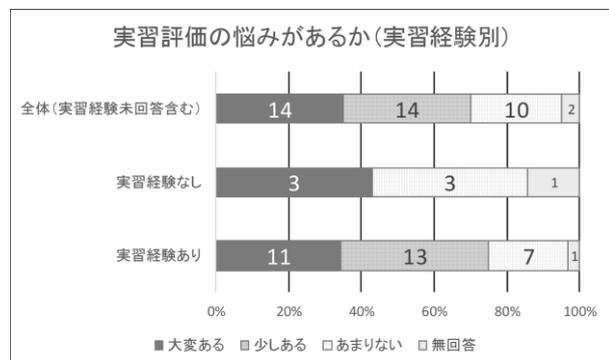


図2 実習評価の悩み(指導者の実習経験の有無別)

「少しある」を合わせると、約 75%となった。一方で、実習経験がない職員は、約 45%となっており、実習経験がない人の方が、実習評価の悩みが少ない回答があった。

4. 2 現行評価に関する具体的な課題

それでは、具体的に現行評価に関してどのような事柄に評価の困難さを感じているのだろうか。自由記述では、「評価基準が具体性に欠ける」「公平な評価なのか不明」「該当しない（判断できない）」「実習中に観察できない」「自分の評価基準がバラバラになっている」「内容やアドバイスの受け取り方が違う」など、多様な記述があった。ただ、これらは大別すると、「現行評価の内容の不備」と「実習担当者の評価のあり方」と捉えることができるのではないだろうか。つまり、実習ノートに記載されている記述内容に不備や不適切な表現があることや、そもそも実習で評価が困難な表現があることが実習担当者から指摘されているということである。また、評価する側としても、自分の評価の妥当性が問われていると考えることができる。それらの課題を克服する上においても、ルーブリックの導入は実習評価そのものの客観性を高めることが可能になるだけでなく、施設において実習生を評価する実習担当者の認識や姿勢を勘案した上でルーブリックを作成し、活用することは極めて意義があると考えられる。

5. ルーブリック評価の利用についての実習担当者の感覚

5. 1 評価のしやすさ

試作したルーブリックを見て、評価しやすいかどうかを尋ねた。今回のルーブリックを用いた評価のしやすさについては、図3のような結果となった。

全体では 32 名 (80%) が「たいへんしやすい」「しやすい」と肯定的評価であり、「少しにくい」が 8 名(20%)であった。図3をみると、実習評価に悩みを抱えている人ほど、提案した試作ルーブリックで評価がしやすそ

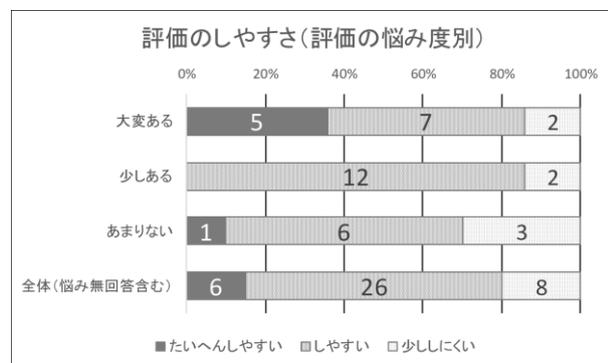


図3 試作ルーブリックの評価のしやすさ(悩み度別)

うだと回答している。指導者自身が実習経験のある方が実習評価に悩みを感じ、また実習指導経験が長いほど実習評価に悩みを感じる結果があったように (図 1,2)、指導者自身の実習経験があり、実習指導年数が長い方、つまり実習評価に悩んでいる人ほど、このルーブリックに光を見出しているのではないかと思われる。

これまでの評価は、「5. 大変よい」「4. 良い」「3. 普通」「2. 努力を要する」「1.かなり努力を要する」と5段階評価である。現行の評価票の評価方法は、評価票の項目に沿って、実習指導者が、実習中の学生の様子を思い浮かべる、実習記録を確認する、関わった職員に意見を聞くなどして、実習後に学生の評価をしていた。今回、評価が「たいへんしやすい」「しやすい」という肯定的な回答の中で、「評価項目の基準が定められているので、誰がしても同じような判断ができ、自信を持って判断ができる」

「評価点を付けるイメージがしやすく、他職員に聞くときも説明がしやすい、さらに具体的に表現されているので、学生にも理解してもらいやすいなど客観的に評価できる」「着目点に対して具体的に表現されているので学生にも理解してもらいやすいのではないか」「今まで、例えば挨拶ができないと全般的に評価が低くなりがちであった、しかし、評価指標が示されているため客観的に評価できる」などの評価基準が明確になるという意見が多くあった。

一方で、評価が「少ししにくい」という意見の中には、「評価内容に具体性がないので「できている」「できていない」の評価が難しい」「施設理解度等、実習生がどこまで理解できているのかは評価しにくい」「ただ、それでも迷うところが出てくると思うし、時間もかかると思う」「評価内容について偏りがあり、中間の評価がしにくい」などの評価の記述の曖昧性についての指摘や、「評価方法が細かい、項目が多い」といった評価項目の質的改善と量的側面に対する指摘があった。

5. 2 より良い評価になるか

ルーブリック評価は、より良い評価になるかの意見を求めた結果を図 4,5 に示す。34 名 (85%) が、肯定的に回答し、特に実習評価で悩みが「大変ある」と回答した 14 名全員が肯定的で、その中でも 6 名が「なる」と強い肯定をした。また、指導年数が長いほど、より良い評価になると考える割合が高くなる傾向があった。

より良い評価になる理由としては、「細かく評価内容がわかれており評価しやすいので時間短縮にもなるし、適切な評価ができる」、「評価基準が適切な項目による評価であれば施設間での評価はいままでのものより良くなる」、「評価者による大きなブレもなく評価できる」など評価基準の明確化によるぶれのなさを上げる意見が多くあった。また、「実習の振り返りができる、学生自身が自分の現状がわかる」「点数内容が細かく分類してあるので評価がつけやすくなり、実習生の問題点が上げやすく指導もしやすい」

「評価項目が細かくなり、良い所、努力を要する項目が伝えやすく、学生にも見えやすいと思います」など、点数をつけるための評価というよりも学生の成長を促す形成的評価の視点での意見も多くあった。

一方、「ならないところがある」と 4 名が回答している。その理由は、「評価項目が具体的でない」「結局のところ人によって評価基準は異な

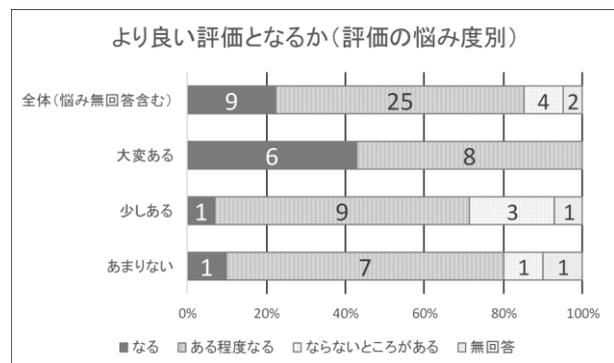


図 4 より良い評価になるか(評価の悩み度別)

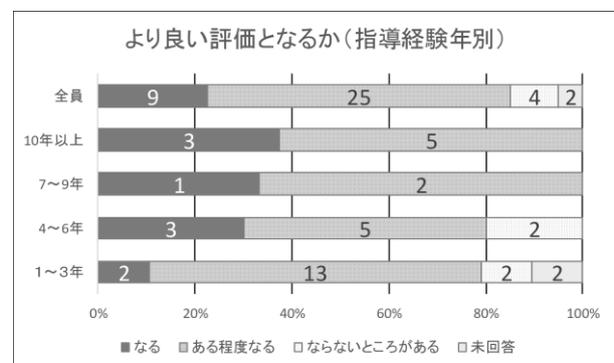


図 5 より良い評価になるか(指導年数別)

る」「1～5点の点数に対する内容で、どの項目も「3点」の内容が曖昧に感じる」などであった。ただ、ならないと回答している人でも、「客観的かつ公平な評価につながると思います」という意見もあった。

6. ルーブリック記述語の課題

個々の記述語について、分かりにくい表現や実態に合わない等、改善すべき点や気づいた点について意見を求めた。

6. 1 分かりにくい表現

分かりにくい表現についての意見を検討したところ、そのような表現を生む要因として、文の構造によるものと語の意味によるものがあることが分かった。

(1) 文の構造による分かりにくさ

文の構造による分かりにくさの例として、実習態度の評価項目「礼儀」の最初の評価指標「朝の挨拶、帰りの挨拶を行い、礼儀正しく行動する」について、「礼儀正しく行動するの意味が分かりにくい」との意見があった。「朝の挨拶、帰りの挨拶」を行えば「礼儀正しく行動」したことになるのか、あるいは、「朝の挨拶、帰りの挨拶」は、「礼儀正しく行動」の例示であるのか判断が分かれる。前者であれば、「朝の挨拶、帰りの挨拶を礼儀正しく行う」、後者であれば、「朝の挨拶、帰りの挨拶を行うなど、礼儀正しく行動する」とすべきであろう。

また、介護活動の評価項目「記録」の最後の評価指標「誤字、脱字や訂正印が無く、適切な表現方法で書かれている」の1点、3点の記述がいずれも「誤字、脱字や訂正印が無く」で始まることに対する指摘があった。「誤字、脱字や訂正印が無く」が「適切な」を修飾すると考えれば、原文も強ち誤った表現ではないが、この指摘のように、「書かれている」を修飾すると考えると矛盾した表現となる。

(2) 語の意味による分かりにくさ

語の意味による分かりにくさの1つ目の例として、類義語の使い分けに関するものがある。「たまに」と「時々」が混じっているので統一できるとはっきりするという指摘があった。「たまに」と「時々」は、どちらも頻度を表す副詞であるが、前者が頻度の少ない様子を表すのに対し、後者は頻度が少なくない様子を表すという違いがある。例えば、実習態度の評価項目「協調性」の2つ目の評価指標「丁寧な言葉づかいをする」では、5点は「いつも丁寧な言葉づかいができる」であり、3点が「職員・利用者に対してたまに不適切な言葉づかいをする」である。「不適切な言葉づかい」は、頻度が少なくとも使ってしまうようであれば、高い評価にならないということである。

語の意味による分かりにくさの2つ目の例として、漠然とした用語に関するものがあり、施設理解の評価指標「施設の概要を理解している」や「介護職の責務と職域を理解している」において、「施設の概要」や「介護職の責務と職域」がどこまでを指すのかが分かりにくいという意見があった。分かりやすい表現での言い換えを検討すべきと考えられる。実習態度の評価項目「協調性」の4つ目の評価指標「相手のプライドを傷つけないかわりをする」での「プライド」が様々な意味に解釈できるので意味を絞ったほうが分かりやすいという意見もあった。

6. 2 実態に合わない記述

次に、介護実習の実態に合わない記述についての意見を検討する。

まず、記述を満たしているかどうか行動等に現れないため評価しにくいと考えられる場合がある。3点の記述に「指導されたことを実践に生かそうとする意欲がある」「利用者の話を傾聴しようとしている」のような表現が用いられている。これは、実際に指導されたことを実践に活かせていたり、利用者の話を傾聴できていたりすれば5点の評価であるところを、そこまで達していないと評価された段階である。しかし、「意欲がある」「しようとしている」は内面の問題であり、どのように評価してよいか分かりにくいため、外面に現れた行動や態度によって評価可能な記述を検討すべきと考えられる。また、5点の記述にも、評価しにくいという意見が出されたものがある。コミュニケーションの中の「利用者の思いや感情を受容できる」や「受け持ち利用者とのコミュニケーションは円滑である」に対して、何をもって「受容」できた、あるいは「円滑」であると言えるのか分かりにくいため、より具体的な記述を検討すべきであろう。

また、自己目標の最初の評価指標「毎日の目標を立案できる」や、コミュニケーションの評価指標「自分の考えを利用者に伝えられる」に対して、目標を立案できていても内容がよくない場合や自分の考えを伝えることができても、伝える内容や伝え方に問題がある場合は評価を下げるべきではないかという意見があった。内容面も評価できるような記述にするのか、内容面は別の評価指標で評価可能なのかについての検討が求められる。

学生の実態に即していないため不要ではないかとされた項目もある。コミュニケーションの評価着眼点「職員との意思疎通が図れる」について、そこまで余裕のある学生はいないので不要ではないかという意見があった。また、介護活動の評価項目「観察」の評価指標「利用者の言葉の背景に気づく」についても、18、19歳の学生には難しく、それを評価に入れるのは無理があるという意見があった。

6. 3 その他の意見

その他の意見として、評価指標の重複を指摘するものがあった。介護活動の評価項目「生活支援技術」の最初の評価指標「利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことができる」とあるが、ニーズの把握と的確な介護実践は全体的に言えること（個別の介護実践に含まれること）なので、「利用者、家族とのコミュニケーションを通して、利用者の望む生活が理解できる」にした方がよいという意見があった。

また、評価点数に中間を認めるべきかどうかについて確認を求める意見もあった。例えば、実習態度の評価項目「健康管理」の「体調管理ができ、欠席や早退がない」において、5点は「まったくなかった」、3点は「数回あった」とされているのに対し、欠席や早退が一度だけあった場合、4点とすればよいのかということである。このような記述が他にも多く、前述した頻度の副詞とも関係するが、3点の記述が「時々」で、5点の記述が「まったくなかった」において、問題となる行動が「たまに」観察された場合、4点としてよいかという問題である。中間段階を認めるならば、その旨を明確にすることが必要であろう。

7. ルーブリック評価の評価項目について

提案したルーブリックにおいて記載した評価項目（評価指標）について、「不足」していると思うもの、「評価しにくい・わかりにくい」と思うもの、「不要」だと思うものを尋ねた（図6）。おおむね、「ない」という回答であったが、評価しにくい項目が「ある」「少しある」という回答が14件で35%と多く、次に「不足が7件18.5%であった。不要という回答は、「少しある」が6件と評価項目が多いわりに少なかった。介護実習で高めたい能力が多岐にわたっていることが示唆される。

7. 1 不足項目について

不足が「ある」という回答者の理由には、「全体的に具体性がないと思われます」「全項目を3段階にする必要はないと思う」とあり、項目の不足に関する回答ではなく、評価基準の記述の曖昧性を指摘しているものと思われる。

「少しある」という回答者の理由は、「「危機意識 事故予防」「コスト意識 個人財産に対する意識」「自己目標」の「振り返り」は大切な部分なので、もう少し広げても良いと感じる」「礼儀について挨拶は朝と帰りだけに縛らない方が良いのではないか」「身だしなみの項目もあったらどうか」「生活支援技術に入浴も入れた方が良い」「観察についての項目が少ない」などがあつた。これらは、いずれも検討に値する指摘であり、「危機意識」「事故予防」「コスト意識」「個人財産に対する意識」「挨拶」「身だしなみ」「入浴技術」「観察」等の項目を追加するか検討を進めたい。

他に、「個人の資質にもよると思うが、本人の表現方法や、努力面の評価をどうするか」という意見があつた。例として、「性格的に内気で声が大きく出せないが、コミュニケーションを図る際に意識して不快にならない距離で会話を実践している」「表情がうまく表現できないが、努力して笑顔を出そうとしている」などをどう評価するかという指摘である。個人の資質による表現の違いや努力面つまり結果には現れてなくとも向上しようという姿勢が伺える場合についてどう評価するかという指摘であり、こちらも記述語の表現に関する指摘であり、ルーブリックそのものについての不審を感じている指摘である。いずれにしても、評価者によって受け止め方が異なる部分であり、その点について評価者によって評価がずれないようにするには様々なケースを想定する必要がある、それをルーブリックでいかに表現していくかは課題であろう。

7. 2 評価しにくい、わかりにくい項目

評価しにくい、わかりにくい項目が「ある」という回答者の理由は、「3点の範囲が大きすぎる項目が多く、1点寄り5点寄りの判断が難しいのではないかと」「施設の概要」「介護職の責務と職域」がわかりにくい」「カンファレンスへの参加がない場合の評価方法」「施設理解の評価着眼点をもう少し現実的な

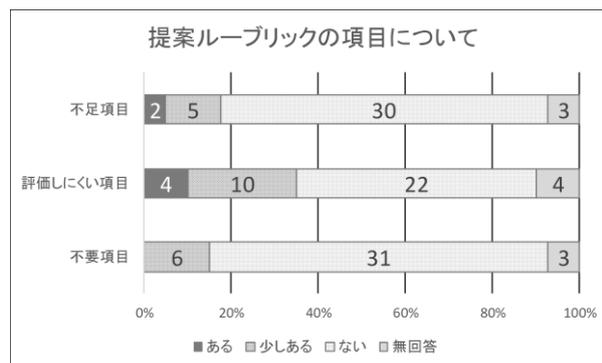


図6 提案ルーブリックの評価項目について

表現にする」「職種の理解では体感（実習）に基づいているか評価しにくい」「全体的に文章が良く似ている」であった。

「少しある」という回答者の理由は、「実習評価で悩んだことがあるとの質問と同じで施設理解での評価は難しい」「ニュアンス的なものだが、個人でとらえ方が異なるのではないか」「カンファレンスや福祉用具など必ずしも該当するわけではないから」「利用者、家族とのコミュニケーションを通して、介護のニーズを把握し、的確な介護実践を行うことができる」を評価指標にしてしまうと、非常にハードルが高く、総括的な内容になるので、コミュニケーションを通じたニーズの把握まででよいと思います」「個人的にコミュニケーションの項目、傾聴、受容が出来ているかどうか。コミュニケーションが円滑かというのは判断が難しい時があるのではないかと思う」「介護活動のレクリエーション関係のところ、“家族と”とありますが、実習中に家族様とのコミュニケーションというのは難しいと思います」「適切、適格が指導者によって違ってこないか」であった。

3つの基準に分けた時に、中央基準の範囲が広く感じるのは記述語の表現の問題であるが、前回の調査において間の点数をつけたいという要望があり、間の評価をしたい場合は、4点や3点として評価して良いとしており、この点をあらためて明確に提示する必要がある。

ルーブリックで記述している「カンファレンス」は、実習中に実習担当教員が参加して実習中の状況を聞く会議のことを想定しているが、そのように受け止められていないことがわかったので、記述表現を変更する必要がある。

文章が似ているとあるが、3つの段階の程度を区別するために修飾語で区別しており、それらの修飾語が同じような表現なので似ていると感じるのであろう。評価項目や評価指標の違いを明確に認識してもらう必要があるが、記述語における修飾語はその程度が評価者によって異なる可能性もあり、修飾語に頼らない具体的な行動表現で段階を区別する必要がある。

「福祉用具が異なる」「家族」とのコミュニケーションがない」など、実習先施設の状況や実習内容によって事情が異なると考えられる点について再度検討が必要である。また、「コミュニケーション」など観察がしにくい項目、学生の実習としては実践できるところまでできないと指摘されている点については検討する必要がある。

7. 3 不要項目

不要項目が「ある」という回答はなかった。「少しある」という回答者の理由は、「施設概要はある程度事前に調べることができるので不要のような気がします」「介護活動の観察、利用者の反応を待ってからという表現が変です」「字だけの表現になってしまう」「全体的に項目が多すぎる」「実習態度の評価項目の礼儀の項目がいるのか？ここは学校できちんと指導できて当たり前にしてほしいので不要ではないか」であった。

評価項目が多すぎるという点についてであるが、実習評価の評価項目が25項目あり、それを評価するための評価指標は現在67指標ある。実習の目的を考えるとこの評価量は仕方がない部分であろう。礼儀については、もっと評価指標が必要である意見もありここでの意見を踏まえて検討していきたい。

8. まとめと課題

実習担当者へのアンケートでは、現行の方法による実習生の評価の課題が多く指摘された。実習ノートに記載されている文言だけでなく、評価者として適切な評価となっているのかが不確かな状況のまま評価しているということや指導年数が長いほど、実習評価に悩んでいることがわかった。そして、それらの人たちはこの提案したルーブリックを使った評価方法を肯定的にとらえている。一方で、ルーブリック評価について知識がなく、理解できずにアンケートに答えられない方々がいた。

記述の分かりにくい表現や実態に合わない等、改善すべき点や気づいた点について意見を求めたところ、分かりにくい表現を生む要因として、文の構造によるものと類義語の使い分けや用語の意味の漠然性など語の意味によるものがあることが分かった。また、記述が実態に合わないものとしては、記述を満たしているかどうかは行動等に現れないため評価しにくい場合などが挙げられた。

評価項目や指標について不足している項目、分かりにくい項目、不要と思う項目について尋ねたところ、「危機意識」「事故予防」「コスト意識」「個人財産に対する意識」「挨拶」「身だしなみ」「入浴技術」「観察」などについて不足している項目として指摘があった。ほかに、「福祉用具」や「家族とのコミュニケーション」などの現場の違いに関わるような評価指標に対する戸惑いや、学生に求める到達目標のレベル、そもそも観察が難しい評価指標などの指摘などがあった。指摘の中には、評価の記述表現に起因するものが多く、あらためて記述表現の難しさが浮き彫りになった。

課題としては、ルーブリック記述語について、今回検討した内容を踏まえた修正が必要である。まず、文の構造や用語の使用を見直し、評価担当者が誤解しないような表現、判断に困らないような表現に修正することが求められる。また、実習内容や実習学生の実態に合わない指摘された記述について、実態に即した記述を目指した修正をしていくことが今後の課題である。

評価項目および評価指標については、指摘された足りない評価項目や不要と指摘された評価項目について評価対象とすべきかどうか検討し、項目や指標の追加、削除、修正を行いたい。

ルーブリックを用いた評価は、一般的に授業担当者と学生の2者が関係する。授業や課題に対してどのようなことが求められており、どこまで達成できたのかということや、どの程度出来るとどのような評価になるのかということが教員にも学生にも可視化された評価である。ただ、実習の評価にルーブリックを導入することは、大学の実習担当者と学生、そして施設での実習担当者という3者が関わる評価となることが、通常の授業でのルーブリックを用いた評価とは異なっている。そのような評価となるからこそ、実習先で実習生を評価する担当職員の意向を反映させたルーブリックの策定が必要となる。「実習生を評価する」といった時に、ともすれば実習先での評価が実習評価全体及び実習成績を大きく左右することにつながりかねない。結果的に評価が緩い施設で実習をすれば、実習評価や実習成績は概ね良好で、評価が厳しい施設で実習をすれば「課題が多い」という評価になってしまう。学生によって実習先が異なる以上、それぞれの実習先での評価にある程度のばらつきが生じることは想像に難くない。ただ、実習評価にルーブリックを導入することで、「どのような項目で」「どのような基準」があり、当該学生は「どのような評価なのか」ということを3者が共有することは極めて重要な評価の指針となりう

るはずである。

実習先へのアンケートを実施した際に、ルーブリック評価を初めて見る方々がほとんどであり、そのため理解できずアンケートに参加されない方々もいた。これから実習で進めていくためには、実習先の指導者の方々に、ルーブリック評価について知識と実践方法について学修していただく機会を設けて、実習先による評価能力の違いに差が出ないようにすることも必要であろう。

(参考文献)

- ・新井英靖 (2017)、『アクティブ・ラーニング時代の看護教育 積極性と主体性を育てる授業づくり』、ミネルヴァ書房
- ・糸賀暢子・元田貴子・西岡加名恵 (2017)、『看護教育のためのパフォーマンス評価 ルーブリック作成からカリキュラム設計へ』、医学書院
- ・尾崎司、中村教子(2017)、「現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (I)」、東京家政大学研究紀要、第 57 (1)、pp.31-41.
- ・三重県介護福祉士養成施設協議会(2018)、『三重県版 介護実習の手引き介護実習ノート』、中央法規出版
- ・福田洋子、青木信子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦 (2017)、「介護実習におけるルーブリック評価の提案」、高田短期大学キャリア研究センター紀要 3 号、pp.51-61
- ・守谷智恵、川上賀代子、坪井誠二 (2017)、「学生実習におけるルーブリック評価導入の子悪露水戸学生の意識調査」、就実大学薬学雑誌、第 4 巻、pp.37-42.
- ・文部科学省 (2012)、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (中央教育審議会答申)」
- ・Stevens, Dannelle D., and Levi, Antonia J. (2013) *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*. Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、俣野典訳 (2016) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部).